

労働の社会学への序説

—— 人間労働の質的变化についての覚え書 ——

中 田 重 厚

はじめに

1. 労働の統制について——“労働一般”概念成立以後

- (1)1880年代から1910年代にかけて行なわれたテーラーの経営上の実験・実践
- (2)テーラー主義に対するジョルジュ・フリードマンの視点
- (3)労働力(labor power)に対するトップマネジャーの二つの経営戦略
- (4)企業内分業における技術的過程と社会的過程
- (5)抽象的人間労働の今日的現象形態としてのSorge,Fürsorge,Besorgen(配慮もしくは気遣い)

2. “労働一般”概念成立以前の人間労働

はじめに

こゝでの叙述は、人間労働を“労働一般(work in general) ⁽¹⁾”概念成立以前と以後に分けて、歴史的過程の中で受けた人間労働の質的变化は何であったかについての研究上の覚え書きであり、今後の研究上の視角を得るための準備的考察である。

“労働一般”概念は、労働が市場経済の中で機能させられるとき、多種多様な労働の質が労働力という商品（もしくは可変資本）という共通の質によって統一され、社会的同質性をもつものに収斂されたものである。“労働一般”概念成立後については、その歴史的分岐点となったテーラー・システムを中心に、労働の統制(control)という側面から考察する。次に“労働一般”概念成立以前の人間労働については文化人類学

や経済人類学の研究成果がとりわけ参考になる。人間労働の本質は労働が資本に包摂される以前と以後の比較において、その推移の中で失なわれたものと新たに付与されたものを検討することによって明らかにされると考える。

1. 労働の統制について——“労働一般”概念成立以後

- (1)1880年代から1910年代にかけて行なわれたテーラーの経営上の実験・実践

テーラーが確立した科学的管理法は、彼と同時代人のアンリ・フェイヨルが「産業並びに一般の管理」の中で、19世紀後半における経営・管理の諸論議や経営実践の洗練化された方法の頂点をなすものとして位置づけている。企業内分業から節約を生じさせる経済的效果について

論じた最初の人にはチャールズ・バベッジであった。彼の「機械とマニファクチャの経済学」は1832年にその初版が出ている。テーラーはバベッジの研究に言及することは決してなかったが、彼の研究を知っていたにちがいないとプレイヴァマンは言っている⁽²⁾。バベッジはテーラーの先駆者として位置づけられる。

いかに生産工程における無駄を省き、そのことによって利潤の極大化をはかっていくかということが当時の工場経営者の願望であったし、同時に世界の工業国として破竹の勢いで経済発展をとげていたアメリカ合衆国の国益にも適うものであった。したがってテイラリズムだけが問題でないことはもちろんだが、重要なことはテーラーほどそのことを徹底してやりとげた人はいないということである。

テーラー以前とテーラー以後では統制概念が質的变化を遂げる。プレイヴァマンはつぎのように言っている「……テーラーにあっては、統制はそれ以前にはみられないほどの広がりをもつようになった」⁽³⁾。テーラー以前の労働に対する管理統制は、いわば工場規律の遵守のための統制であり、労働者の作業そのものに対する統制とはなっていない。テイラリズムにおける統制とは、作業における労働の裁量権、決定権の剥奪であり、テーラー以前のものとは決定的な相違を示している。彼の工場管理方式は、現場から一切の知的・計画的部分を取り去り、それらをすべて経営側に集中しようと企図するものである。職能別職長制度という新しい経営組織が捻出され、これまでの万能型フォアマンに代わってそれぞれの専門のフォアマンが工場内のすべての職場を分掌することになる。この制度によって、計画 (planning) と実行 (doing) の分離というテーラー主義の大原則が実用化されるに至った。

(2) テーラー主義に対するシヨルジュ・フリードマンの視点

テーラーの行なった経営上の実践の核心である計画と実行の分離ということについてG・フリードマンはどうみているであろうか。G・フリードマンは、1950年代の資本主義諸国の労働組織の状況とソヴェト連邦の労働組織の状況を観察し、ソヴェト型の計画経済の下でも技術進歩が多くの単純労働を生みだしていることから、計画と実行の分離はすべての産業社会を結びつけている公分母であると考ええる。こうしたフリードマンの視点は、現存する労働過程をすべて技術的発達の結果、必然的にもたらされたとする技術決定論であり、こうした見方からするとテーラーの行なった経営実践の真意を握み損なってしまう。

だがこのように言っても、G・フリードマンのつぎのような観点までも否定してはならないと思う。彼は「人間と技術に関する7つのエチュード」⁽⁴⁾の中で今日目ざましい発展をとげている工業技術が人間生活のあらゆる領域——労働現場であれ、家庭生活、街頭、余暇などの領域であれ——を変貌させてきている現状から、こうした状況を〈技術的環境〉と名づけ、生活様式や人間の思考様式までをどう変えていくかの考察を行なっている。

彼は〈自然的環境〉から〈技術的環境〉への推移ということで事態を捉えようとしており、独創的な二つの概念を提示している点は評価しななければならないと思うし、また、こうした側面の考察は重要と思う。このような研究は、今日例えば、アメリカにおける子供の研究——クレイグ・ブロードの「テクノストレス」はこうした側面を扱っている。この本ではエレクトロニクスや電子機器にとりかこまれた生活が子供たちの感覚や思考様式をも変化させている様を

分析している⁽⁶⁾。

フリードマンの〈技術的環境〉という概念は独創的であり、一定の有効性をもつことができる。しかし、生産の技術的過程もしくは労働過程が価値増殖過程、生産関係にどのように媒介されているのかの観点が完全に欠落しているため、それは皮相な観察になっていると言えよう。

テーラーシステムに対するG・フリードマンの視点を通じてこのことを検討してみよう。G・フリードマンは、「細分化された労働」⁽⁶⁾において、変貌をとげている生産現場の労働を、人間としての労働者の視点から観察している。文脈からは、G・フリードマンの人間主義がにじみ出ている。

テーラー主義について彼はつぎのように言う。

「テーラーの行なった動作分析、計画と実行の分離（知的労働と肉体労働との徹底的な分離）、彼の体系の本質的な分離である標示カードの細密な規定が事実上工場で動作の単純化と節約を理由にして、職務から、技術の知識、技能資格、創意性を奪いとるに至った。」

更につぎの叙述が続く。

「……装置と労働力による直接の能力を増大させるための方法の完成した体系に他ならないものを、科学と名づけるのは誤りである。」以上のフリードマンの指摘はそれだけをみればテーラー主義に対する適切な指摘ととれる。がしかし、つぎのような叙述がそれに続くとき首をかしげざるを得なくなってくる。

「……何よりも真摯で真面目であり最良の意向によって動かされていた人間テーラーと彼の体系の現実、それが産業と組織の歴史の中で演じた有効な役割とを区別することをしなければならぬ。」

ここまで読むと、先の文章の「事実上」という

文字に傍点が振ってある意味が理解出来る。つまり、フリードマンの言わんとするところはこういうことなのだろう。テーラーは経営上の改革にあくまでも真摯で、真面目にとりくんだ。しかし、彼の当初の主観的な意図はどうかであれ、その結果は、労働現場から労働者の知的創意、技術上の知識・資格を剥奪することになった——と。フリードマンはテーラーその人については断罪せず、あくまでも不幸な結果のみを断罪する。主観的意図と客観的結果とを分離し、後者は主観的意図の予期せざる結果であったとしてもいうのだろうか。

しかし、これは事実と反していると言わねばならない。科学的管理法の神髄である計画と実行の分離ということでテーラーが意図したことは、現場の労働者の統制権、裁量権をほとんど跡形もなく取り去り、それをすべて経営側のスタッフ部門である計画部の専門的職長に担当させ、経営者の統制権を強化することであったことはテーラーの著作を読めば、テーラー自らが率直に語っていることからして明らかな筈である。にもかかわらず、フリードマンはテーラーの当初の意図を見損っている。

そこで、この点を明確するために、テーラーの著作に添ってテーラー自身に語らせようと思う。

テーラーは、テーラー主義以前に存在していた生産現場の状況についてこう説明している。

「……伝統的知識の集積をもっているのは、管理者のもとで2、30の職種に従事している500人から1000人の労働者たちであり、管理者の方はそのような知識はほとんどもっていないということを、管理者自身率直に認めている。」⁽⁷⁾

職長や監督者は現在管理者の地位にいるが、彼らはそれぞれの職種で一流の労働者としての経験をもつのだが、その彼らとしても、彼らのもつ

ている知識や個人的な技能は、部下の全労働者の知識や技量を合わせたものに比べるとはるかに及ばないということを、彼ら自身が一番よく知っていると言っている。そこで、この当時の経験に長けた管理者は、労働者につきのようには振舞うのである。

「……管理者としての役割は、各労働者にできるだけ奮励努力させ、伝統的な知識、技能、器用、やる気——一語でいえば『創意』(initiative)を發揮させ、使用者に出来る限り大きな利益を与えさせることにある。」⁽⁸⁾

当時の労働現場における管理者と労働者との関係をテーラーは見事に把握している。そして知識や技能をもった労働者によって職場が運営されていたということがよく分かる。だがしかし、いや、であるからこそテーラーは、労働者の創意を發揮させることを求めず、むしろ反対に創意を失墜させる方向に模索したのだった。そこで、つぎの二つの原理が案出されてくる。一つは、

「従来労働者たちがもっていた伝統的知識をすべて集め、この知識を分類し、集計し、規則、法則、公式にまとめることが……管理者の任務となる。」

これまでは現場の仕事は、それぞれの労働者が自らの裁量で行なっていたが、テーラーは彼らの中で用いられている最も迅速な方法と便法を見だし、それを管理者の統轄により統制することを試みる。第一原理は労働者の技能から労働過程を引き離し、それを管理者側の統轄の下におくということである⁽⁹⁾。また、第二原理は頭脳労働部分を可能なかぎり職場からとり去り、これを計画部または設計部に集めることである。このことによって職場の労働からは人間的な部分がすべて抜き去られ、動物的行為、もしくは道具的行為のみが残る——抜き去られた後の残りかすとしての人間労働、労働過程の非人

間化は、テーラーの抱いていた労働者観によっている。彼はミッドヴェール製鋼工場で労働者たちと一緒に働いていたときから彼らを軽蔑し、敵意にも似た感情を抱いていた。二カ月後彼は組長に抜てきされ、テーラーは配下にある機械工たちと紛争状態に入り、彼は能率増進のための方策をつぎつぎに実施に移して行くのである⁽¹⁰⁾。

テーラーの描く労働者像は、ただひたすら企業利益をあげるために黙々と働く働き蜂タイプの人間像=ホモ・エコノミクスであった⁽¹¹⁾。1880年代から1910年代にかけてテーラーは、企業の中で人間改造を試み、1920年には志を同じくしてフォードが、生産領域で疎外された労働者を消費の面で充足感を感じる人間に仕立てあげる。

G・フリードマンのテーラー主義評は、以上述べたように肝心な点については的はずれで、かなりあいまいなものである。しかしながら今日の労働現場で起っている事態についてのフリードマンの経験主義的認識のいくつかは貴重であり、傾聴に値すると思う。その一つに、熟練労働者と半熟練労働者との相違点についての指摘がある。労働者の経験の重要な部分は、加工される材料についての知識であるが、

「手工業的職人時代から継承された伝統的職務を細分化することにより、合理化は、ときには緩慢に、ときには迅速に、労働者から彼らの職業生活のもっとも貴重であったもの、すなわち材料との接触とその知識とを奪ってしまった。」⁽¹²⁾

今日の労働現場を代表する多能的半熟練労働者にとっては、彼らの保持する知識は断片的なあれやこれやの知識にすぎず、かつての熟練工のもっていた材料についての知識は事実上消滅しているとフリードマンは言う。今日のアセンブリーラインの工程における労働には、かつての

ような熟練多能工のないしは職人的な訓練を受けた労働者、「万能工」よりも半熟練労働者（何でも屋、すなわち多能的半熟練労働者）の方に分がある。

(3)労働力 (labor power) に対するトップマネジャーの二つの経営戦略

資本制生産体制下での労働統制 (control) もしくは労働の権能 (power) を考えるとき、それと対抗関係にある経営権との関係でみていかねばならない。この点については、アンドリュー・L・フリードマンの考察は貴重な手がかりを与えてくれる。A.L.フリードマンは管理者の労働力に対する権威の行使を二つの側面に分けて考察している。一つは、トップマネジャーが市場の変化に応じて変化する組織・技術に適合するように労働力を陶冶するよう試みることであり、第二は、トップマネジャーが、労働者の自らの仕事の中で行使する統制を剥奪したり制限したりする試みである⁽¹³⁾。

ただし、この二つの側面は現実にはつぎのように密接に関連し合っている。つまり、「トップマネジャーは、労働者の個々の活動の行使を弱めるために労働過程を再組織化しようと試みるであろうし、また同時に、たとえば機械が導入される時のように、ただひたすら、相対的剰余価値を増大させることにのみ適合させようと試みる」⁽¹⁴⁾のである。

トップマネジャーが労働力に対して権威を行使する二つの戦略の第一のタイプは、労働者が経営側から仕事を任せられ、責任を負っている形の自治 (Responsible Autonomy) であり、第二のタイプは直接統治 (Direct Control) である。それぞれについて、A.L.フリードマンはつぎのように説明している。

「Responsible Autonomyの戦略タイプは、労働者に時間的余裕を与えることによって、

また、労働者が会社に資するようなやり方で、変化していく状況に適応するよう励ますことによって労働力の適応性を利用しようと試みることである。以上のことを行なうことで、トップマネジャーは労働者に地位と権限と責任感を与える。また、トップマネジャーは労働者の忠誠心をかちとり、会社の理想（すなわち競争的闘争）に協力的な労働者の役員を会社の新役員に選出しようとイデオロギー的に試みる。Direct Controlの戦略タイプは、強制的脅迫やきめ細かな監督、また個々の労働者の責任能力を極小化することによって、労働力の範囲を制限し、これを変えようと試みるのである。第一のタイプの経営戦略は、可変資本に備わった特有の利益を手に入れようという試みであり、第二のタイプの経営戦略は、可変資本のもつ特殊有害な効力に制限を加え、労働者たちをあたかも機械であるかのようにとり扱おうという試みである。この二つの経営戦略は、資本主義の歴史を通じて管理を特徴づけてきたが、しかし次第に、この二つのうちのResponsible Autonomyは一貫して特権を有する労働者に適用されてきたし、またDirect Controlはそれ以外の労働者に適用されてきた。」⁽¹⁵⁾

以上のA.L.フリードマンの考察は大変興味深い分析と思われる。二つの経営戦略はいわば硬軟二様の戦略であると同時に、労働者層を二分させるものである。以上のことからつぎのような分析視角を得ることが出来る。

すなわち二つの経営戦略の一方のResponsible Autonomyは、特別な訓練と知識を有する労働者の特権層を育て、他方では、Direct Controlの主たる対象である非持続的な大量の労働者群を育てる。この二つの経営戦略が歴史のあらゆる段階で行なわれるとすれば、技術革新、組織の更新が起きるごとに、企業内の労働者群

の二極分解が繰り返し生ずると考えられる。

(4)企業内分業における技術的過程と社会的過程

以上“労働一般”概念成立以降の人間労働を労働の統制ということからテーラー主義を中心に考察してきた。ここで最も注意すべきことは、資本制的生産関係に規定される人間労働の問題と、資本制の技術的過程の下で生ずる人間労働の問題を混同しないことである。テーラーが企図したことは、現場の熟練労働を解体させることであった。しかるに、熟練労働の解体を技術的過程から生ずる必然的過程として捉えてしまうと、技術決定論に陥ってしまう。G・フリードマンはこの陥穽に落ちてしまい、テーラー主義の本質を見失ってしまった。そうならないためには、資本制的生産関係によって技術的過程がどのように媒介されているかを考えること、つまり両者を統一的に捉えることが重要である。

さて、一般に、企業内分業もしくは個別的分業とはいかなる事態なのか。これについては、ブレイヴァマンが明解な説明を行なっている。彼はまず、企業内分業を社会的分業とはっきり区別し、社会的分業は、それぞれの職業がそれぞれの生産部門に適するような形で、社会を諸職業間に分割するが、企業内分業は職業そのものを破壊するもので、これは資本主義社会特有のものであると言っている。社会的分業は社会を細分化するが、社会の細分化は個人と人間全体を向上させるものである。一方、個別的分業は人間を細分化するが、個人の細分化は、人間の能力と欲求を顧慮しないで行なわれるとすれば、人間と人間性に対する犯罪となると彼は言う。「生産過程における分業は、労働過程の分解(analyse)、すなわち生産労働をその構成要素に分離(separate)することから始まる。けれどもそのことはそれ自体では部分労働者を生み出

すことはない」⁽¹⁶⁾のである。アダム・スミス「諸国民の富」の第一章にあげられているピン製造マニファクチャーの例では、諸作業工程が分離・分割されているだけでなく、それらが相異なる労働者に割当てられている。作業工程の分離・分割は企業内分業の技術過程であり、この技術過程を前提とし、それぞれの工程が相異なる労働者に割当てられる社会過程がそれにつづく。企業内分業の前段階はいわば技術必然的過程であるが、それが後段階にまで進むことによって、労働者の技能そのものの破壊＝熟練労働の解体＝部分労働者の創出という事態が発生する。企業経営者は、分業の第一段階から利益を得るが、更に第二段階にまで進むことによって巨大な利益を得ることが出来る。アダム・スミスが当時のマニファクチャー製造の分業による生産力の飛躍的發展に驚嘆の声をあげているのもうなずけるところである。けれども、アダム・スミスには、労働者の技能の破壊という事態には目がっていない。

ただし、以上のことで付言しておかねばならない点は、企業内分業の技術的過程と社会的過程は、全く別個の過程ではなく、両者は媒介し合い、統一したものであるという点である。

(5)抽象的人間労働の今日的現象形態としての Sorge, Fürsorge, Besorgen (配慮もしくは気遣い)

ハイデggerはSorgeを実在的な意味で捉えている。Sorge(気遣い)には、道具と他者と自己自身への気遣いの三通りのものがある。道具的存在者に対する現存在の気遣いはBesorgen、他者への気遣いはFürsorge、そして現存在の存在、すなわち自己自身への気遣いはSorgeである。このように「私たちが道具と他者と自己自身を気遣うのも、私たち人間の根本的あり方、すなわち現存在の存在が気遣いそのもので

あるからに他ならない⁽¹⁷⁾のである。「道具と関わりつつ世界の中で存在している現存在は、他者としての現存在を目的として存在し、いつしか他者の支配にゆだねられてしまいかねない⁽¹⁸⁾。かくして、「現存在は、日常的な相互共存存在としては、他者に隷属しているということが、ひそんでいる。現存在自身が存在しているのではなく、他者が現存在から存在を奪取してしまっている」。つまり、「他人の意向が現存在の日常的な諸存在不能性を意のままにしている」のであるが、この場合他者とは特定の他者であり、「ひと自身が他者に属して、他者の威力を強化している」のであるから、他者とは「日常的な相互共存存在においては差当ってたいい『現にそこに存在している』当のもの⁽¹⁹⁾」であり、「現存在は、平均化され、均等化され、責任を免除されて迎合し、自己本来の在り方を喪失した中性者となり、誰でもない者になってしまう。このように主体性を失って誰でもない中性者としてのあり方をしているときの現存在を、ハイデッガーは世人 (Das Man) と名づける⁽²⁰⁾」のである。

このようにハイデッガーにより不特定化、中性化されたものとして捉えられた「他者」は、人間存在のありようを説明するには的をついたものと言えようが、反面このことにより、「他者」の階級的構造が抜き去られてしまうと考える。

カレル・コシークは、以上のようなハイデッガーによる人間存在の特徴づけである *Sorge* を抽象的人間労働の今日的現象形態としてとらえ返し、蘇らせる。つまりコシークは、ハイデッガーの捉えた人間的世界の特徴は客観的現実の変化の反映であると考え。彼はつぎのように言う。「配慮 (*Besorgen*) は、抽象的労働の現象形態である。労働は、すでに、物質的、管理的、精神的なその全領域において、たんなる配慮と操縦としてあらわれるほどまでに分化され、非

人格化されている。……《労働》の概念と《配慮》の概念との交換は……一定の仕方での客観的現実そのものの変化を表現している。《労働》から《配慮》への移行は、人間的諸関係の深まりゆく物神化の過程の神秘化された反映である。すなわち、人間的世界は日常的意識……に、諸装置、諸設備、諸結合と諸連関——その中で個人の社会的運動は、事業欲、多忙さ、緊張など、要するに配慮として進行する——の出来上った世界として開示される。個人は、諸設備と諸装置の型にはめられた系の中でうごき、それらを配慮し、それらに配慮される。しかし彼は、すでに以前から、この世界が人間の産出したものであるという意識を《失って》きた。配慮が全生活に浸透している。労働は数多くの独立な諸操作に分断されていて、どの操作も、生産におけると同様、管理においても、その操作者を、それを遂行する器官をもっている。操縦は、仕事を、眼の前にもつのではなくて、全体としての仕事への眺めわたしを許さない仕事の抽象的一部分をもつのである。……」⁽²¹⁾

ハイデッガーおよびコシークによって特徴づけられた今日の間労働の特質を実証研究の出発点に据えたいと思う。

2. “労働一般” 概念成立以前の人間労働

前資本主義的生産様式では、資本主義とは全く別様に、

「《労働》は一つのカテゴリーになりえない。つまり労働は〈非経済的な〉、むしろ社会全体の構成につながる関係によって組織化されている。労働は先行する親族や社会関係の一つの現われであり、これら諸関係の実践でもある」⁽²²⁾。

フランソワ・パイオンは、上記のようなM・サーリンズの指摘にもとづいて労働の考察を行なっている。パイオンは、労働を考察するのに技術

的過程、生産過程だけをとり出して純粹に経済的な視点から考察することは正当なことだろうかと問い、「生産活動がその中にくみこまれてはいるか」、生産過程の現実の技術的ないし経済的諸条件としては、直接に関与していないような、儀礼、自然の表象システム、権威関係を放置しておくことが、方法論的見地からみて可能だろうか⁽²³⁾と言っている。

文化人類学や経済人類学の諸業績は、前資本主義社会の労働について教えてくれる。また、労働史の分野では、例えば、ハーバート、G・ガットマンの研究がある。そこで彼はアメリカの工業化過程における前資本主義的な労働文化と、資本制的規律の強制に対する労働者の抵抗についての興味深い分析を行なっている⁽²⁴⁾。前資本主義社会の労働について考えることは、今日とりわけ重要であると思われる。何故なら、今日の人間労働は資本制的合理化過程の下で著しく特殊化され、質的低落を被っていると思われるからである。

今回の論文では、前資本主義的生産様式の下での人間労働の検討は未了のままである。また、今日の労働現場の実証研究であるKai Erikson & S.P. Vallas(ed.)*The Nature of Work, Sociological Perspective*については言及できなかった。次回に期したい。

〔注〕

- (1) Maurice Godelier, Language and History, Work and its representations, *History Workshops*, Autumn 1980. M.ゴトリエは、上記の論文で“労働一般”とは、農業や製造業、商業等に備わっている労働の特殊形態から切り離されたものとして観念される労働のことであり、この観念がケネーの「経済表」(1759年)からスミスの「諸国民の富」(1776年)への経緯の中で現われたと言っている。

また、つぎの書にもその記述がある。Patric Joyce(ed.), *The Historical Meanings of Work* (Cambridge University Pr.), p.2

更に、クロード・レヴィ＝ストロースは、“労働一般”の観念は西欧社会の「労働」の観念だと説明する。「西欧における労働の観念は二つの観点によって規定されている。一つは、労働とは神の力によって人間に課せられた「罰」であり…もう一つは、商業経済および資本主義の観点からの規定で……それは「労働一般」という考え方で、いいかえれば、職業によって、また目的に従って、個々に別々のものとしてとらえられるような労働ではなく、売買という操作の中で溶け合っているような労働」であるといい、市場の機能を通してあらゆる種類の労働が等質化されると説明している(「構造・神話・労働」(みすず書房刊)の中の“労働の表象”(1977年11月、日本での講演))。

- (2) Harry Braverman, *Labor and Monopoly Capital* (Monthly Review Pr.N.Y.1974), p.89 (邦訳「労働と独占資本」岩波書店 98頁)
- (3) Ibid., p.90 (同上 99頁)
- (4) ジョルジュ・フリードマン「技術と人間」サイマル出版会
- (5) クレイグ・ブロード「テクノストレス」(新潮社刊)、この類の本は最近特に多いが、そのうちの2～3を示すとつぎのような本がある。ニール・ポストマン「子どもはもういない」新樹社、寺内定夫「感性があぶない」毎日新聞社。
- (6) ジョルジュ・フリードマン「細分化された労働」川島書店
- (7) Frederick W. Taylor, *The Principles of Scientific Management* (Harper & Row), p.32
- (8) Ibid., p.33
- (9) Harry Braverman, *Labor and Monopoly Capital*, pp.112-113 (邦訳 126-127頁)
- (10) Ibid., p.92 (邦訳 101頁)
- (11) Andrew L. Friedman, *Industry and Labour*

- (The Macmillan Pr.LTD),p.93
- (12) G・フリードマン「細分化された労働」川島書店 14頁
- (13) 経営管理層によって行なわれる労働過程の再組織化に対する労働者の反抗と、現存組織の下での労働への統制に対する労働者の反抗とを分けて考えることは、労働運動史を観る際、有効だと思われる。
- (14) Andrew L. Friedman, *Industry and Labour*, p.78
- (15) Ibid.,pp.78-79
- (16) ブレイヴァマン「労働と独占資本」86頁
- (17) 世界の名著 62巻 (ハイデッガー「存在と時間」) 中央公論社 32頁
- (18) 同上、33頁
- (19) 同上、240頁
- (20) 同上、37頁
- (21) コシーク「具体的なもの弁証法」せりか書房 79-80頁
- (22) フランソワ・ピイヨン編「経済人類学の現在」法政大学出版局、90頁
- (23) 同上、90頁
- (24) Herbert G. Gutman, *Work, Culture and Society in Industrializing America*,1966
- (なかた しげあつ、本学科教授)